

女子大学生の教育相談に関する研究

神谷かつ江（教育心理学）

1 はじめに

本学に学生相談室が開設されて以来、学生相談室の相談員として延べ500人を越える女子学生と個別に相談をしてきた。相談内容は、進路や就職に関することをはじめとして、友人に関する悩み、男女交際、家族内での問題、不安や情緒などの神経症的相談、性格上の悩み、自分の生き方などさまざまな問題であった。相談内容によって情報提供や指示的な助言をおこなって1回から2回で済む面接もあれば、共感的に理解し受容的な態度で真剣に話し合いを継続するケースまでいろいろであるが、長期的なカウンセリングを求められる相談事例が多い。

本研究では女子大学に共通してみられる女子大生の悩みの概要を紹介する。方法は、私自身のカウンセリングの経験を踏まえながら、他女子大学の事例報告や文献などから追求する。女子大学生に共通する悩みを紹介しながら、現代女子大生の姿を垣間見ることができれば幸いである。

2 相談内容

以下に述べる内容は、平成4年度から平成8年度までの5年間の相談内容をまとめたものである（資料1）。資料では8通りに分類してあるが、それらをさらに細かく検討し、13項目に分けて論述した。

(1) 進路相談

本学は短期大学であるため、併設大学への編入、他大学への編入相談は年を追うごとに多くなっている。短期大学でも数々の資格取得が可能であり、卒業後の就職率も高い実績をあげているが、専門職となると不利な点もあり、門戸も開かれていない場合もある。卒業後の進路先が決定しているときは励ましや助言といった、1・2回の相談で終了するが、相談者自身に迷いがあるときは長期化することが多い。このような場合、表向きの相談主訴は進路相談であるが、その背後に家族問題が孕んでいる。経済的に恵まれている学生は、親の勧めもあり4年生大学へ編入する傾向が高いが、問題となるのは、親の希望と本人の希望とが一致していないケースである。この場合、親は就職を望み、学生はさほど勉強意欲はないものの、このまま就職してしまうことに抵抗がある場合である。まわりの友人が進路先を決定していくにつれ、焦りと不安でいらいらが募り誰にも相談できずに来室するのである。相談に来たときは、何をやりたいのか目標とするものは何なのか、どう生きていくかなどを話しあう。本人の目標が定まるまで数回来室することになる。しかし卒業が近づくにつれ、編入学や専門学校・家業の手伝いに進路を決定し、落ち着いていく場合が多い。

(2) 不本意入学生

以前ほどではないが、不本意入学による相談も数件ある。こんなはずではなかった。私はここの大学に来るつもりはなかった。担任に勧められたからと一連の不満をぶちあける。大学に愛着がもてなくて、担任を憎悪したり

クラスメートに陰性転移を生じることもある。不本意入学の悩みがいつのまにか友人関係にも障害を生じ、クラスで孤立したり、授業中でも受験雑誌をこっそり読んでいたりしている。講義は欠席がちで自宅で一人悶々と過ごし、退学していくケースもある。

相談室に来室した場合は、その気持ちを受容し、真剣に受けとめ、短大卒業後に併設大学への編入、再受験などをするようアドバイスしている。幸い、現在は併設大学への編入に意欲的であり、毎年受験者も増加しているのでポジティブに前向きに対応できるようになってきた。

(3) 無気力学生

平成8年度の大学・短大への入学志願者は約78万5000人(全国進学情報センター:1996)に達し、みんなが行くから大学へ進学する、親や教師が勧めるから進学するという学生が多くなった。そのため大学に入学はしたものの、目的意識もないまま、登校だけはするという学生が増加してきた。このような学生は90分授業が苦痛で、授業中は近くの席の人とおしゃべりをしたり、それに飽きるとうつろな目でボーと時間が経過するのを待っているかしている。中には最初から最後まで顔を伏せ寝て過ごす学生もいる。

これらのことから、高校ならびに家庭における進路指導の重要を切に感じる(松原, 1987)。高校では本人の適性、興味、性格、関心を十分に把握したうえで適性学科を選択するよう指導すべきである。また家庭では、将来どういう人生を過ごしたいのか、わが子と充分話しあうべきである。

無気力学生(土川, 1992)が相談室に来室することは稀である。相談内容が見い出せずドアをノックすることに抵抗があるからである。といって話し合うことを避けているのではない。むしろ声をかけてほしいのである。現実の自分の姿を知っているだけに、意欲や自信が喪失しているのである。このような場合、学生をよく知っている担任の介入が望ま

れる。担任は教育者であると同時にときには学生の母親として、または父親としての役割をしなければならない場合もある。友人の呼びかけや担任やゼミの先生の温かい配慮で意欲的になり、自分の道を見いだすこともできるのである。

(4) クラブに精を出す学生

いつもジャージの体操着を着て日焼けした顔が健康そうであるが、クラスではどこことなく浮かない顔つきでおとなしくしている学生である。同じクラブ仲間がクラスメートとして一緒の場合はまだ笑いも見られるが、クラブ仲間がいない場合は沈みがちで孤立してしまう。クラブには熱心で優等生でありそれなりの実績もあげているが、一步教室に入ると別世界という感じでクラブでの表情と違い冴えない。授業も休みがちとなり、たまに出てきても関心がないのかわからないのか、寝ていることが多い。どうしたかと声をかけても固く心を閉ざして話さない。クラブ内での軋轢や顧問の先生との不調和らしいとクラスメートの声が聞こえてくるが、クラスメートも話しかけようとはしない。そっとしておこうと容認されるタイプである。

このような学生は学生相談室には来室しない。体育選手は身体も強いが、心もたくましくなければならないという暗黙のメッセージが受け継がれているようなので、体育関係者以外に相談を持ちかけることに抵抗があるようである。体育選手にはスポーツカウンセラーが対応することが望まれる。努力や根性、忍耐といった言葉をたたき込まれて今日に至ったので、相談員には自らも体育選手として名をあげた体育選手専任の相談員が必要と思われる。

しかし2年生になると、大部分の体育選手が大学に適應して卒業し、就職している。卒業後はむしろ会社の花形として重宝がられているようである。

(5) アルバイトに精をだす学生

本学は小人数クラス編成を採用しているの

で、欠席がちな学生はよく目だつ。欠席が多い学生のなかにアルバイトを本業としているのではないと思われる学生に出くわす。アルバイトは高収入を得られるし歓迎されるので、本業の学生より楽しいのである。授業では浮かぬ顔でボーとしている学生が近くのコンビニでキビキビとお客に対応しているのを見て、同一の学生かと驚くことがある。学校の顔と外の顔がまったく違うのである。あらためて学校では不適応を起こしても、社会ではそれなりに順応していくものだというのを感じる。このような学生は相談室には来室しない。担任から相談室に行くように言われた学生のみが指示されてやってくる。この場合、学生との話しあいは簡潔に済む。えてして学生は勉学に意欲をもっていないので、勉強をするようにとは言わない。留年してしまうよとか、卒業だけはしようねとアドバイスすればよい。2年生になって就職の時期がくるとすんなりときまっている。高望みをしないので、最初に採用された企業に入るか、現在熱中しているアルバイト先に就職している。

(6) 家族関係の相談

家族は私たちとはきってもきれない関係であるため、家族関係の問題で相談にくる学生は、複雑な問題を孕んでいることが多い(岡堂, 1985)。複雑であるだけに見ず知らない相談員には相談にはこない。相談にくる学生は授業などで顔見知りになり、相談員との信頼関係が成立している場合である。相談内容は父親が酒乱であるとか、経済的に困窮して授業料が払えないとか、母親が再婚相手とうまくいかなくなり喧嘩が絶えないとか、相談者自身では解決できない問題ばかりである。酒乱の父親を持つ学生は、父親が慢性アルコール中毒のため入退院を繰り返す生活のなかで過ごしている。当然のごとく有給休暇は遣い果たし、給料は減額される。会社を首になるという恐怖もある。酒を飲むと人が変わってしまう父親、娘に酒を買ってくるよう怒鳴

る父親、拳げ句のはては母親との大喧嘩、泣き叫ぶ声、……地獄ともいえる家庭のなかで生活している学生もいる。経済的に困窮している学生は両親が不仲で別居、もしくは離婚をしており、片親だけの収入では授業料を払えないことが多い。たまに両親が揃っていてもカード破産であったり、会社が倒産して現金収入が得られない場合である。入学時の入学金や諸手続き金は問題なく収めるが4月と9月に収める授業料を収めることができない。授業料未納のことを学生が知らない場合が多く、学内での学生はいたって元気であり、こちらが首を傾げることもある。仕方なく学生本人に連絡することになる。はじめて事を知った学生があわてて相談にくる。そして払うから在学できるようにと哀願される。学生は毎日登校してくる。このようなケースの場合、親は、娘が登校さえすればそれで済むと思ってしまうようで、大学側から督促があっても期日を延ばすだけで埒があかない場合が多い。そして2年時になってしかたなく除籍ということになる。これでは学生も不幸である。

上記のような学生の場合、学校こそが息抜きの場所であることを学生本人が知っているので、いさかいやどうしようもない悲しみかられるときは、来室毎数も多くなる。筆者には相談者の悲しみの心をただ聞いてあげることしかできないが、それだけでいいようである。決して同情ではない相談者との心の共有、それを共感的理解というのであろうか、同じ気持ちになることが大切である。授業料未納のケースは別として、担任や友人の温かい励ましで卒業していく。

(7) 対人関係の相談

女子大生のこのころの悩みの中で必ずあるのが対人関係の相談である。大学生活が天国になるか地獄になるかは、良き友にめぐり合えるかどうかで明暗が決まってしまうといっても過言ではない。女子学生は往々にしてグループを作りがちであり、入学して5日もすれば40人クラス編成なら6・7グループが形成

される。このときのメンバーはたまたま入学式で席が隣りであったとか、出席番号が近かった、通学路が同じという物理的・心理的に近い距離のものと結びつく(山下, 1990; 川瀬, 1988)。ところが1週間過ぎその物理心理的仲間同士がまあまあやっつけそうなメンバーならばその仲間が「うちの仲間」として卒業まで存続するが、思考や趣味・興味の相違がわかり「うちの仲間」として、所属不可能な場合はすぐに所属可能なグループに入会しなければならない。このことが可能である期間は入学後2週間が1つのめやすである。3週間もすれば誰の目にもはっきりとした小集団が形成される。現存するグループをみると、人数は5・6名でその中でも気が合う仲間と授業時は臨席しているようである(川瀬, 1988)。

対人関係の相談で来室するケースには2通りのケースがある。一つは当初にグループに入りそこねて気がついてみたらひとりぼっちというケース。もう一つはグループには所属しているが、メンバーと気が合わないことがわかり、他のグループに入りたいが、強固な壁が既に形成されて入れないケース。この2つは相談主訴は同じであるが、相談内容は大部異なるので分けて考察してみたい。

・グループに入れない学生の相談

この学生には以下に述べる幾つの特徴が見られる。①おとなしく見るからに内気である。②全体的雰囲気や地味を越えて暗いこと。③たえずおどおどして顔色も冴えないなどの特徴がある(神谷, 1993)。

女子大学の一つの大きな特質ともいえるものが、ランチタイムである。女子学生の大多数は学内で昼食をとる。昼食場所は学生ホールであったり、教室であったり、学生食堂であったりするが、この昼食時に一緒に食べてくれる仲間がいるかいないかは大学生活に重要な影響を及ぼす。もちろんいつも誰か仲間がいて、楽しいランチタイムを迎えている学生には楽しいひとときで済むが、いつも誰と

食べようか、食べてくれる人はいるかと心配している学生にとっては、その後の出席を左右してしまうとても大切な時間である。確かに学生ホールを見渡すと、ひとりぼっちで食事をしている学生は見かけない。みな楽しそうに雑談をしながら食べている。一人でしかとれない学生は、人気のないベンチでとるか、時間をずらして食べているのである。楽しいはずの昼食が苦痛の時間になるとき、当然のように勉強にも興味を失っていく。勉強のみならず、服装にも化粧にも関心が薄れていく(神谷, 1992)。授業も欠席がちとなり、たまに登校しても強固なグループの壁には自分から話しかけることもできず孤立していく。クラスメートからも孤立学生の烙印を押され、疎外されていく(工藤, 1983)。このような学生は学生相談室に来室する。相談室への相談主訴は単位を取得できず進級が危ぶまれる、という悩みで来室することが多く、数回の面接で孤立学生ということが認識できる。単位取得に関して、担任や担当教員に連絡するといづれもブラックリストに載っていることがわかる。相談室では単位取得に関しては担任と連絡をとり担任に一任するが、相談者の心の悩みを聞くように心がけている。話し始めるとたくさん訴える。どれも暗く、楽しい話しは聞かれない。時間的にも長時間となり、面接も回数を重ねることになる。孤立することが大学に入って初めてということはむしろ稀で、小学校時代からその素質を持っていたことがわかる(若林, 1988)。男子生徒に悪口をいわれたり、先生からも疎外されてきたことを訴える。最後の期待をもって大学に入学しても、入学して早くも1週間でその望みが叶わぬことを確信する。相談室がシェルターとしての役割を果たす(山本, 1987)。

このような学生は概して性格に問題があることが多く、これまでの体験の蓄積のためか悲観的で愚痴っぽい。また卒業するまで来室することが多いので、相談員は予約日時や時間を定め、週1回、もしくは2週間に1回のペースで面接することが望ましい。相談員と

のラ・ポールが形成されるにしたがい、依存心や依頼心が強くなることが多く、陰性転移を起こして相談員に逆恨みする可能性も生じるからである。相談者の心の訴えを十分に聞いて、時には励まし、時には助言を行い、温かい雰囲気に対応することが特に求められる。そうした心の絆の形成により、相談者も少しずつ自分をみつめることができ、自信の回復や自尊心を高めることもできるのである。

・グループでの人間関係に悩む相談

前述したように女子大生は入学まもなく、物理・心理的グループを形成する。なぜ出席番号が近かったり、入学式でたまたま隣り合わせだったものが、仲間になりやすいか。このことについて、フェスティンガーらは、初期の友人形成には物理的接近性が非常に大きな役割を果たすという。なぜならば、

- ① 近くの人、労力（コスト）もかからないし何かと便利である。心理的報酬も多い。
- ② 近くの人、何かと知り合うチャンスが多い。
- ③ 相手の顔を毎日見ていると、その人に安心感を持ち愛着が持てるようになる。

などの点を挙げている（斉藤，1987）。

このことは女子大生にもあてはまる。

さて物理・心理的に近いグループの者同士が、なんとなく似ていたり行動をともにするうちにしだいに愛着にまで発展する場合は、卒業まで平穏な学生生活を過ごすことができる。ところが、思考の相違がわかり趣味も興味も異なるグループに所属したことがわかる場合、その後の学生生活は落ち着かず地に足がつかない状態となる。それならば別のグループに変わればいと安易に思っても、そこには強固な壁が形成されて外部からの侵入を困難にする。このことに関して小林（1993）は、女子大学生を囲障に例えて説明している。それによると女子大生の囲障は男子学生の囲障より高くそして厚い。このことは女子大生の囲障の方が男子大生の囲障よりも内部からの脱出および侵入を困難にすると同時に、

障内で生活するメンバーに安心感を与えたり、同士の結びつきを強めたりするのも役立つという。しかし所属集団に不満を抱いて離脱を決意したばあい、男子学生と女子学生では行動の差が見られるといている。つまり男子学生のグループは囲障が低いので簡単に飛び越えて他のグループの囲障に参入することが可能であるし、また転入後加入を希望したグループも今までと類似した構造をもっている。これに対して女子大生の囲障は高くしかも堅固であるので、飛び越えることはおろか他のグループの参入をも難しくする。そこでそれらのことを無視して脱出を試みようとした女子学生は当然なことに行き場を失い、ついには人口衛星のようにそのグループの回りをうろうろする。だから彼女たちはリスクを冒してまでグループから抜け出ようとはしないし、いったん入ってしまったグループ内で律儀に生きようとしている。

学生相談室に来室する学生は人口衛星のようにぐるぐる回っている学生か、停まってはいるがグループ内での不調和でくたくたになっている学生であると小林（1993）もいう。前者は思いあまって脱出を試みたが着陸することを阻止され、孤立を余技なくされた学生のため絶えず不安で緊張している。このような学生の話しを聞くと、女子学生無情を痛感してしまう。村八分という言葉があるが、1グループ内でのいさかいが全体的に波及してしまう。事実クラスメートの態度もよそよそしく、授業時の自由グループ編成も仲間に入れてもらえず担当教員が相手になっていることが多い。学生相談室では励ましと助言で対応している。後者は一応グループ内に所属しているので、脱出を試みたときに予想される事態を話し停まるよう助言する。いづれにしろ、両者とも傷つき悲しんでいるのでその心を十分に受容し、力づけている。そして一度壊れた人間関係の修復は難しいので、このことを今後の社会生活に役立てるよう助言する。

(8) 対人恐怖症の相談

対人恐怖症とは「対人恐怖とは対人場面で不当に強い不安や緊張を生じ、その結果、人から嫌がられたり、変に思われたりすることを恐れて、対人関係を避けようとする神経症である。亜型として赤面恐怖、視線恐怖、自己臭恐怖、醜貌恐怖等がある。青年期に多い病態で、主としてその前期に発症し、性別としては男子に多い」(永田, 1995)と定義づけられている。

対人恐怖症に苦しむ学生は多い。もっともそれは女子学生に限らず、わが国特有の関心の高い神経症であるらしい。永田(1995)によると、対人恐怖症を生むような土壌がわが国にあるのではないかということである。それによれば「日本人の対人関係は独立した個人と個人の対等な関係があるわけではなく、相互の間柄によってその場が規定される。要求を通すためには、意見を戦わせるよりも、調和をはかり、対人関係を円滑に保つことが重要となる。そのため直接的な言語表現よりも、気持ちを察するとか、暗に示すという形でコミュニケーションが行われ、表情、視線、しぐさなどの非言語的サインが大きな意味を持つ。そこから相手の態度や自分に対する評価を読み取っていくわけである。」

対人恐怖にかかりやすいものの特徴としては、

- ①人一倍理想が高く、負けず嫌いである。
- ②人よりも優れていたいと願う反面、人から疎まれることを非常に恐れる。
- ③そのため必要以上に過度に配慮的にふるまう(成田, 1988)。

などの特徴がみられる。特に青年期後期の自意識の高まりとともに他人の目が過度に気になる状態は、アイデンティティ形成上の女子学生にとって、正常なものでも一過性の対人恐怖的症状になることがある。急速な心身の変化を受容しながらも自らの自己像を再統合しなければならぬことや、親元を離れて仲間との関係をつくり、社会人としての参加を課題とする女子学生にとって、理想と現実のギャップにどのように振る舞っていいのか立

ち往生してしまうのである。このような発達課題上に起こる対人恐怖症は、その気持ちを受けとめアイデンティティ形成上での発達のためにつまずきであることを本人も受容できれば、自立へと飛び立っていく(高橋, 1985)。

しかし、幼少期からの環境や性格に起因する対人恐怖症は錯綜とした背景をともなうことが多い。大学に入って問題が発生したということはむしろ稀で、中学校時代にいじめにあっていたり、保健室登校であったり、養護教諭にお世話になりながら登校していた。このような学生が来室すると下を向いて、不満をたくさん訴える。期間も長期化することが多く、多くの学生が卒業時まで来室しながら登校している。前述したように女子大学ではグループが形成されるので、当然のように孤立化していく。人間は社会的な動物である。誰からも支援されずにひとりぼっちになっていくことは耐えがたい苦痛を伴う。相談室ではその気持ちを受容しながらも、ひとりでは生きてゆけないことを話しあい、励まし支えている。

自分の性格は、簡単には変革できない。今後は行動療法による態度変容を試みて成果をはかりたいと思っている。

(9) いじめの相談

大学でもいじめがあるのかと驚く人がいるかも知れない。ところがいじめられた、無視されて辛いと訴える相談がある。内容を知ると果してこれがいじめなのかと首を傾げることも多いのだが、相談者にとってはいじめられたという認識をもっていることだけは間違いない。

女子大学ではどのようないじめがあるかというと、圧倒的に多いのが仲間による無視である。挨拶をしてくれない、目を合わせようとしない、態度がよそよそしくなる、欠席しても声を掛けてくれない、近くに寄ると避けるなど仲間からの拒絶である。無視されたことは自分の存在が否定されたようで、深い悲しみへと突き落とされる。

次にあげられるのが聞こえよがしに悪口を

言われることである。例えば体育の授業時にバレーボールやソフトボールなどの集団プレーを行っている際、相談者が失敗すると大声で笑ったり、やじをとばしたり、なじったりして笑いものにする。クラスメートの面前で行われるので、恥ずかしいのと同時に激しい怒りとなるが本人にも責任の一端があるのでむしろ悪かったという気持ちにさせられる。

暴力や持ち物隠しやたかりといった悪質ないじめはさすがに皆無であったが、仲間うちによる無視は大学でも行われていると言えそうである。

いじめられたと訴えてきた者にはいくつかの共通点があったので、原因究明にもつながると思うので列記してみたい。

共通点の1

相談に来たものの多くが、「自分は駄目な人間だ」「自分は嫌われているに違いない」「自信がない」などネガティブな自己像の持ち主であった。もっとも無視されて自信を喪失しているもので、そうならざるえないのである。性格的にも暗くもじもじしており、覇気がない。そのネガティブさ故にささいな言葉にいたく傷ついてショックを受けてしまう。相談者のなかには「あんたはクラスの嫌われもの」と言われた言葉をそのまま受容し、反発することもなく、自分はその通りの人間だと思込んでいる気の毒な学生もいる。

共通点の2

彼女たちは人づきあいが不得手ということがあげられる。いじめられやすい者は無口でおとなしく、友人と冗談をいったり、ふざけたりすることができない。といって親和欲求が弱いのではない。むしろ人一倍強いのである。しかし溶け込めないのである。このことについて村上(1976)は、対人距離がうまくコントロールできないことと、主体性の脆弱性を指摘しているがまさにその通りである。このような彼女たちに対して第三者、つまり仲間たちはおもしろ味に欠ける、影響力を受

けない、目ざわりな存在として映るので、ついには排斥させられるのである。

このタイプとは逆に、強烈な個性の持ち主も、仲間から特異な存在として見られることが多い。このタイプの者は自分から同調しようとしないので、結局は無視されるということになってしまうようである。

共通点の3

第3の特徴として、欲求不満に対する耐性の欠如が指摘できる。相談者のなかには無視されることが耐えがたい苦痛だといって、退学したり登校拒否という現実逃避の道をたどってしまうものがいたが、果してそれが無視といえるものであったかは検討の余地を残している。自分から進んで仲間に溶け込もうとしなかったり、欲求不満に対する耐性が欠如しているために簡単にあきらめてしまうのである。いづれにしても思い込みが強く、自分の世界に閉じこもりやすく、また傷つきやすく被害感情を持ちやすいということはたしかである。それだけに対応はもとより、心情を正しく知ることが難しいケースがある。

共通点の4

どちらかという、身だしなみがだらしない学生がいじめられるようである。相談者のいづれもが自己の外観に無関心で、装う、着飾る、おしゃれをするということと無縁であった。若い多くの女性が服装や身だしなみにあれこれ神経を使ったり、仲間とおしゃべりするのには、他人の目に映る自分を意識しているからであり、またそれは自己像を認識したいと願うがゆえなのである。他人の評価に無頓着であったり、自己の身体像に否定的であるということは適正な自己概念を阻害するだけに、今後も問題を残すといえよう。

なお清潔感との関係において、若い女性の多くが体臭、口臭、髪形を気にするだけに、このような対象者が無視されることの標的になりやすいことも考えておくべきであろう。

(10) 学生の幼稚化現象

幼稚化現象の悩みで相談に来る学生はいない。しかし多くの女子学生を観てきて、学生の幼稚化現象ゆえに問題が派生していると思われる相談は多い(松原, 1987)。男女共学の先生が非常勤で女子大学の授業を受け持つときにまず頭をいためるのが、授業中での私語であろう。私語については多くの研究がなされているのでここでは割愛するが、女子大学の私語で悩まされた先生は多いであろう。私語をはじめ学生の幼稚化現象が目だってきた。たとえば10分のトイレ休憩に学生は仲間を連れだっていく。昼食の一緒はともかく、トイレは一人でいけばいいと思われるが、いつも一緒である。トイレも一緒、食事も一緒、帰りも一緒と、一人では何もできない学生が増えている。四六時中一緒に息がつまってしかたがないという相談を受けるのである。誰しもひとりでは生きていけないので、仲間を求めるのだが四六時中べったりされてはおのずと欠点も目につき人間関係にも支障が生じてくる。もう少し距離をおいて付き合おうと仲間に提案したところ、「私を嫌いになったのね」と誤解され、「あのときはさみしい思いをした」とまるで男女交際での会話のようなことを言われるという。

前述したように女子大学では、入学まもなくグループを形成するが、グループに固執していたい安らぎを求めたい学生ほど、幼稚であるようである。そのような学生はボーイフレンドを作ることよりも、同性の仲間を求める。何でも心から話しあえる親友と呼べる友がほしいのである。このような学生は高校時までの友だち作りに失敗しており、大学が最終チャンスであると認識している場合が多く、友だちさがしは血眼になっている。仲間の言葉に一喜一憂し、絶えず仲間の言動を観察している。これでは相手から嫌がられて当然である。このような幼稚化現象は多くなった。

学生の幼稚化現象は核家族に伴う少子化現象と両親の過保護などと関係しているといわれている(松原, 1987)。本学の学生もひと

りっ子、二人兄弟が多い。恵まれた環境で生活している学生もいる。学生の身分で専用自家用車を所有しているものもいる。両親は自分が苦勞した分、子どもには不憫な思いをさせたくない、学校だけは行かせたいと願う。食事の後片付けや布団の上げ下ろしなど、わが子にさせない親が多いと聞く。子どものためにが、子どもの自立を妨げるということを認識している親が果してどのくらいいるであろうか。

学生が幼稚になった分、当然大学ではきめこまやかな指導が求められる。学生は「こうしなさい」とこちらから指示することには素直であるだけによく言いつけを守る。ところが学生の自主性に任せてと、大学側が待ちの態度でいた場合、自発的に動き出す学生は皆目少ないだろう。

学生が幼稚になったということは、素直で従順でおだやかな性格の学生が多くなったことでもある。そのことは繊細で脆弱で精神的に未熟な学生が多くなったということにもつながる。友人のなにげない一言で悲しい気持ちとなって相談室で泣きだしてしまったり、下宿生がわけもなく不安になって人恋しくて相談室を訪れることもある。相談室ではその気持ちを受容しながら学生が少しでも元気になればと願って相談にあたっている。

(11) 恋愛に関する相談

相談主訴としての恋愛相談は少ない。もっとも他の相談に付随してボーイフレンドや恋人の名前はよく聞かれるが……。この相談こそ友人同士がよき相談相手になるのではないかと思われる。

本学は短大であるので18歳から20歳の思春期真っ盛りの女子学生であるが、ボーイフレンドがほしいという願いよりも、同性の友人を得たいと願うようである。生田(1989)の「思春期女子登校拒否の治療事例」に紹介されているように、「この年齢の女の子は仲間と身をよせあっていなければ不安でいたたまれないことが多いようである。しかもその仲間

うちで、お互いの感情をあれこれと押し量り、一喜一憂していることが多い。友人がいないとやっていけないものの、友人と一緒にまたた気を使う、という環境のなかで神経をすり減らしていることも稀ではない。それでも同じ年の友人で、心から打ちとけられる相手を求めるのが、自然の現象なのであろう。」(菅, 1988)。……

このように異性への関心の前に、同性の同年齢の女性への関心の方に気を取られるため相談内容としては少ないと思われる。もっとも恋愛に関しては多くの大人もそうであるように、心の内部の密かな思いとして大切にしまっておきたいと願うのかもしれない。

(12) いわゆる重篤といわれる学生の相談

学生相談活動のなかで、精神分裂病的といわれる、いわゆる重篤といわれる学生との出会いは少なくない。精神分裂病とは「精神分裂病、精神分裂、あるいはたんに分裂病ともいう。かつては精神乖離性ともいった。発生頻度の高さ、病像の特異性、治療の困難さなどから、精神医学の臨床において今日もなお最も重要な位置を占めている疾患である。にもかかわらず、本病の身体的基盤については今のところ確実な知見が得られていないのでその診断はもっぱら精神症状の経過とを観察することによってなされる。まず経過の特徴としては、(1)主として青年期に発し、(2)しばしば人格の統合性において特有の欠陥を残遺するか、ときには人格の荒廃状態に至る。次にその精神症状は既知の身体的基盤をもつ精神病や心因性の病像にふつうにみられない特有の症状で、はなはだ複雑多岐にわたるが、あえて要約すれば、①対人接触に際しての特有の障害(姿勢のかたさ、不自然なごちなさ、表情の少なさ、心の通じにくさ、コンプレックス感など、②主観的症状：世界陥落体験、迫害妄想、心奇妄想、血統妄想などの妄想、対話性幻聴、作為思想、影響体験など、③客観的症状：自閉性、両価性などと呼ばれる特有の感情・意思障害、衝動的興奮や昏迷

などの緊張病性症状、言語新作や支離滅裂思考などの思考障害などに分けられよう」とされる(精神医学辞典, 1988)。治療法については「治療は本病の原因が未だ不明なため対処療法の域を出ないが、今日では向精神薬による薬物療法と、内閉的生活に患者を固定させないための精神指導的療法と、患者の内的世界を理解し、内的統合を促す精神療法の三つを適宜組み合わせる行うのが理想的な治療形式となっている。また近年の世界的傾向として、できる限り社会との接触を保たせつつ治療をすることが提唱され、開放療法、早期退院、デイ・ケア、外来通院療法、コミュニティ・ケアなどが関心事になっている。」とされている(精神医学辞典, 1988)。

上記のことからもわかるように、多くは青年期に発症するため入学後の環境の変化に適応できずに発症へと向かうケースは多い。相談室に連れてこられたB子の行動を紹介すると、B子は入寮1日目に突然泣きだしまわりの学生をびっくりさせた。入浴をしない。顔も洗わない。食事に誘っても返事もしない。そのかわり夜中に菓子をぼりぼり食べ、廊下を徘徊する。無断で他人の部屋に入り、何も言わずに菓子を持っていく。無断外泊してもケロッをしている。整理整頓ができない。ベットのまわりはごみだらけ。注意をしても反省するどころか、相手を見殺しにしている。独り言をいっては笑っている等々。

堪り兼ねた寮生が寮監に訴え連れてこられたのであったが、その行動は日を迫る事に悪化し、入寮から一月で退寮の羽目となり、自宅にて生活指導を受けることになった。その後自宅でも幽霊がでる、恐いと騒いだことにより、医師の診察を受けるが、思春期症候群、放置しておくで精神分裂病に移行のおそれありの診断であった。直ぐさま入院となるが本人の希望もあり1か月で退院し、服薬のうえで家庭療養することになった。家庭では洋裁学校に通ったり、自動車の免許を取ったりしたが、本人及び家族が復学希望。

当初の入学から2年を経て再入学してきた。

精神分裂病の疑いありと診断されて、一時休学していたもののなかには本ケースのように、再入学するというケースは稀にある。そうした学生の多くは精神科に通院しながら薬の投与を受け登校している。当初病院に通院していたころよりも症状はよくなるものの全快ということには程遠いが、家でじっとしているよりは社会との関わりを閉ざさないことを医師は勧めるようで、親も本人も学校だけは出たいと思うようである。本人に病識がない場合はその思いも強い。親も何もせず家でボーとしているよりは、せめて人並みに大学だけは卒業させたいと願う。

さてそうした学生が復学した場合、病院や施設できちんと治療を受けているので、その上に関わらなくていいのではと考えがちであるが問題はこれからである。精神分裂病的といわれる、いわゆる重篤な学生は大学生活のなかで感じる、そのときどきの小さな不安を処理する能力が低いので、実際の大学生活のなかで適応できるよう援助することが必要になってくる(田畑, 1992)。「座る場所はどこがいいですか」と聞いてきたり、廊下ですれ違った人から、「変な人」と云われた(云われていないと思うが)と泣きながら訴えてくる。それも同じことを何度も繰り返し、その都度同じ返答をするやりとりが続く。村上(1992)がいうように重篤な学生が精神病院でどういうケアをされているかということではなく、そのケアがまさに大学の学生という身分を持ったうえで、その人たちの生活の場である学生生活そのものにどう適応していくかということが、学生相談の立場からとくに重要な課題になっている。

私たちにとってはちいさな不安でも相談者にとっては大きな不安になり、そういうものに対する日常の援助が大切である。しかもそうした学生はいろいろな問題を頻発して長期化し、慢性化していく傾向が多いので相談員も忍耐強く根気よく援助していくことが要求される。そうしたやりとりのなかで、卒業は本人にとっても親にとっても最大の目標とな

る。たとえ就職できなくても、卒業まで導く援助はそれ相当に大きな意義があることだと思われる(田畑, 1992)。

女子大学で見られる相談内容をまとめてみた。これらの項目のなかには女子大学、共学を問わず現代学生の心の悩みを浮き彫りにした内容も多いと思われるが、女子大学で特徴とされる相談もいくつかみられた。本研究でそれが明らかになったことと思われる。

いずれにしろ、松原(1987)がいうように、男女とも「未熟」で、「依存的」で「自己中心的」で「近視眼的」な傾向をもっているかもしれない。言うならば学生のみならず、大人も子どもも青年も老人も、淋しがりやで、甘えん坊で、依存性が強いのもかもしれない。

これらの特徴は、本人を取りまく家庭環境や学校教育、社会との関わり、対人関係など種々の影響によって形成される。ある面では現代社会が生んだ学生の姿でもある。これらの学生にどう対応し援助したらよいか、引き続き課題である。

3 学生相談における相談員の心構え

最後に、学生相談で心がけている事がらを列記して結びにしたい。

(1) 初対面の出会いを大切にす。

実際に相談にあたっていると、進路相談や就職相談のような情報の提供や指示の享受を行うだけの相談は少ない。進路相談とは表向きの相談で、その背後には複雑な問題が孕んでいることも多い。相談者は決意して来室してきたのだという思いを大切に、初対面での出会いを特に大切にしている。相談員が授業などで既に顔見知りの場合は、半ば相談員の人となりわかって来室しているのでいきなり相談を開始することも出来るが、初対面ということも多い。その場合の出会いが重要である。相談者は相談員がどんな人柄か、信頼できそうか、話しやすいかなどさまざまな

観察をしている。初回の第一印象で相談が継続するか1回で終わってしまうか決まるといってよい（中西，1985）。

筆者は初回の相談では簡単な自己紹介を行っている。相談者は相談員の名前も知らないことが多いので、自分の名前を告げてから相手の名前を聞くようにしている。そうすることによって相談者に安心感をもたらすことができるのである。

(2) 真剣に傾聴する。

ロジャーズがいう受容と共感的態度（中西，1985）は今更言うまでもないが、相談者の悩みを真剣に傾聴する態度を大切にしている。相談者が自分の悩みで困り、相談員にわかしてもらいたいと悩みの経緯や現状を訴える相談は、話し終えるまで真剣に傾聴する。反対に相談者の口が重く、悩みが何なのか何のために来室しているのか相談者自身がわかっていない相談もある。その場合重い口を開かせるのに苦勞する。そのような場合はまず雑談から口火をきって、相談者が自ら悩みを打ち明けるまで待ちの態度が求められる。口の重い学生の相談は要領を得ない内容もあるので、再度同じ言葉を繰り返して相談を明確化する必要がある。その時も真剣に傾聴するという態度はそのまま相談員の姿として相談者に反映する。

(3) 相談者に好意をもつ。

孤立学生やいじめられ学生の相談の中には、相談者自身の人柄等に問題があり、そのことに相談者がまったく気がついていないことも多い。悪いのは相手で他人や教師の悪口ばかりいう人。要求はしっかりするが、自分では何もしない人。責任を転化する人。問題をはき違えている人。……こういう人は結構多い。

このような学生の相談に応じることは大変である。相談員も人間である以上、いつも良い雰囲気や相談が続けられるとは限らない。失敗事例を紹介する。

D子は家庭的に問題があり、おまけに勉強

が嫌いだった。高卒で就職したほうがD子にとってはプラスになったのではないかと思われる位、よく休んだ。どの教科も出席不足で単位が危ぶまれた。そんなD子が相談にきた。面接を約束しD子は来室した。小柄でおどおどし、見るからに内気そうである。出席不足で全教科テストの受験資格が無くなりそうだと相談であった。休むので必然的に友達ができなくなり友人がいないことも、D子の悩みを深くしていた。担任に連絡すると担任も事の重大さを承知していた。D子のやる気次第といわれた。D子はいますぐにも退学したいが親が許さないから登校しているのだといった。本人にやる気がないためどうしても欠席してしまうことがわかった。といって親を説得してまで辞る決意はなかった。やめることができないD子は続けることしかなかった。そのことを相談のなかでも何度も話しあい、D子も納得した。にも関わらずD子は欠席して、また相談にくるということが続いた。相談中、D子は自分の非を認めないばかりか、友人の悪口をいい相談員に依存的になっていた。言葉でうまく表現できないときは、手紙に記してきたが他人への責任転化は改められていない。こうしたやりとりが続き、ますます依存的になるD子に嫌気がさした。相談員の胸中を察したのか、D子から手紙がきた。その内容は相談員に対する痛烈な批判であった。面接での一挙一動が書かれ、助言した内容についても余計なお世話と肘鉄を食らわされた。この手紙をもらった夜は寝つかれなかった。説教や非難の類は親や教師から散々聞かされてきたことだった。D子が求めていたのは、説教ではなく心からの対話であった。

カウンセリング関係は特殊な人間関係であるという。人間性の回復と成長を目指した治療的かわりを基本としている関係だと言うことである。相談者が他の人間関係ではほとんど経験できないような、ありのままの自分が相談員に無条件で受け入れられ、受容的關係のなかで、相談者は自己をみつめるきっかけをつかむことができるのだという（中西，

1985)。その基本的な態度からいっても本事例の面接は失敗であった。失敗であると同時にこの基本的態度を享受することはなんと難しいことかということに改めて実感した。

そのような意味からいってもこの面接は、今後の面接のあり方に重大な示唆を投げかけた。カウンセリング関係においては、まずその人に好意をもつことが前提であることを再認した。受容的關係とは相談員と相談者とがお互いが肯定的な関心を抱いていること、つまりは相談者があるがままに受け入れ好意を示すことである。このことを基本的態度として日常の相談を心がけている。

(4) 適度な心理的距離

いかなる人間関係においても適度な心理的距離を保つことは大切である(中井, 1994) 相談者との信頼関係が成立して共感的理解が深まってくるようになると、なおいっそうこのことが求められる。相談員に信頼をよせてくれることは喜ばしいが、予定外に突然来室したり、終了時間になっても退室する気配のないときは、折角の相談もうわの空になってしまう。緊急の場合は致し方ないが、事前に相談者に予約日時と時間をきちんと伝えることは、継続的相談においては必須である。相談者は他の人間関係ではほとんど経験できないような、ありのままの自分が受け入れられるので、毎日相談員に話し相手になってほしいと依頼してくることもある。そのような場合は、毎日会う必要のないことを相談者に話し、面接日を1週間に1回もしくは2週間に1回と決めている。間隔を空けて会うことで相談者の心の変化も読み取れるし、お互いの慣れあいも打破できる。また相談が深まってくると、相談員に難問を要求したり、駄々をこねた子どものように拗ねることもある。こうした場合は相談員への依存性が強まっているときで、やさしいということに甘えや八つ当たりにはき違えている。慣れ合いは禁物である。相談者への依存が高く、自立することへの不安や疾病利得のために問題解決をしぶ

る場合に多く見られる。そのようなときは、面接の間隔を少しずつ長くしたり、自立への不安を話しあいのなかで取り上げて、終結こそが治療的働きかけであると理解を求める相談もある。何れにしろ、適度な心理的距離は学生相談には欠かせない。

(5) 人として平等であるということ。

人として平等であるということは簡単そうで、実はすごくむずかしい。女子学生に「嫌いな先生はどんな人ですか」と聞くと、“こんなことも知らないのと、人を馬鹿にする先生”“質問して答えられないと蔑む先生”が圧倒的に嫌われる。教え方が少々下手でも許せるが学生を小馬鹿にする先生は許せないという。どんなに学問的に権威があっても、学生を見下す先生は一斉に反発される。同様なことが学生相談員にもいえる。

学生相談を担当するにあたり、肝に命じていることは人として平等であるということである。学生相談では教員と学生という上下関係はない。もちろん大学のなかの学生相談員として、教員としての一人格の相談員と学生という身分の相談者という関係は拭いとれないが、あくまでも人格対人格を基盤して相談に当たっている。

カール・ロジャーズは相談過程において治療的变化が起こるために求められる条件に次の6つを挙げている(中西, 1985)。

- ① 2人の人間が心理的に接触を持っていること。
- ② 相談者と呼ばれる一方の人間は心理的に傷つきやすく不安な状態にあること。
- ③ 相談員と呼ばれるもう一方の人間は、2人の関係のなかでは安定し統合されており、ありのままの自分でいられること。
- ④ 相談員は相談者に対して無条件の積極的・肯定的関心を示していること。
- ⑤ 相談員は相談者の内的な見方や感じ方の枠を共感的に理解していること。
- ⑥ 相談者は自分に対する相談員の無条件の積極的・肯定的関心と共感的理解を、少なくとも

も最小限認知していること、であるとした。

この6つの条件で相談員に直接関係するのは③④⑤の条件である。この3つをさらに探究すると、以下の3つの態度が相談員に求められるという。

①自己一致（純粹さ）

相談員は2人の関係のなかでそのつど豊かに体験され実感されている、ありのままの感情の流れにそいながら、十分に情感をかけてあげられる状態にあるべきことを意味している。つまり自己矛盾のない本心を表明でき、その言葉に自己の全責任性をおくことのできる存在でなければならぬのである。こうした相談員のあり方に対して、相談者は信頼できる真実の姿を感じることができるのである。相談員がありのままの自分でいられないときは口先だけの治療になってしまい、非治療的であることが多いという。

②無条件の積極的・肯定的な関心

「受容」という言葉で一般的に理解されている態度である。相談員が相談者があるがままに受け入れ、好意を示すことを言っている。ただひたすら相談者の言葉に耳を傾ける姿勢などは、これに裏づけられている。この受容的關係のなかで、相談者は自己に対する安心感を培い、自尊感情を育てていけるようになる。ただし無条件の絶対的尊重はあくまでも理想であって、いかなる治療関係においても程度の問題として考えるべきであろう。

③共感的理解

相談員が相談者の情動的体験を、相談者が感じているままに理解すること、相談者と同じように世界を体験することを言う。相談員が相談者の言葉や感情のなかにこめられている暗黙の意味を感じとり、それを能動的に反応することと言いかえることもできる。ところでこうした知的・客観的解釈や診断的理解は共感的理解ではないといって敬遠して、主観的情動的理解だけに頼ろうとする相談員がいるが、共感的に理解しようとするとき、知的・客観的な認知は不可欠であることを忘れてならないという。

以上の3条件が密接に関連しあって、治療的人間関係を成立させているとロジャーズは述べている。

これらのことを念頭に相談活動を行っているが、相談員も一人間である以上なかなか理想どおりにはいかないのが実状である。

(6) 相談者をほめること。

私たち日本人は本人を目の前にして、称賛したりほめたりすることが苦手である。子どもが幼いうちはほめたり叱ったりして、しつけの習慣化に活用したり、賞罰を取り入れたりして適度に活用してきた。ところが大人になるにしたがって、ほめるということに照れや抵抗があるのか積極的に相手をほめようとはしない。

学生相談においては、相談者の長所を見つけ出し相手をほめて認めることを必ず行っている。この効果は大きい。えてして相談者は自分に自信がなく、不安感や劣等感情が人一倍強い傾向にある。そのような学生は他人に映る自分の姿を過少評価し、自尊感情も低いのである（遠藤，1981）。

エリクソンは青年期の発達課題を自我同一性の確立にあるとしている。自我同一性が得られるということは、「両親とくに母親からの分離と個としての自立、社会とのかかわりの中での自己価値についての確信、同性同年輩の友人との親密や交流を通しての他社愛の能力を発達させること、異性愛を可能にするための性的同一性の基礎づくり」……といった点にあると考えられる（生田，1989）。

自らの自己価値を見いだせない相談者には、こちらから積極的に働きかけて自己の存在価値を教えてあげることが必要である。自己価値をいうと難しく聞こえるが、平たくいえば長所である。相談者本人に魅力が少なく、長所となるべき点を見いだせないときは弱点を逆手にとって、長所に変換して相談者に伝えることが必要である。

相手をほめると「そんなこと言われたことがなかった」と一様に同じ答えが返ってくる。

その表情には戸惑いと恥じらいと照れ笑いがみられるが、やがて積極的に自分の利点を聞きだそうする。その場合丁寧に応答することが求められる。「あなたにはこんな素晴らしいところがある」と真剣に教示する。このことは相談者の自信の回復に効果をもたらすと同時に、相談員にとっても「かけがえのない人の形成」を心に切り刻むことになる。そうしたやりとりのなかで、ラポールも形成され、共感的理解を深まることができるのである。

文 献

- 1 松原達哉：学生相談室から見た現代学生像 学生相談研究9 (1) 1987
- 2 駒米勝利：女子大学における修学相談 大学と学生330文部省 1993
- 3 土川隆史：アバシー学生への援助技法 現代のエスプリ296キャンパスでの心理臨床 至文堂 1992
- 4 山中寛：スポーツにおける動作法の位置づけ 現代のエスプリ別冊 至文堂 1992 5 岡堂哲夫：家族心理学の課題 現代のエスプリ215家族療法と親教育 至文堂 19856 山下敏郎：児童心理学 全国社会福祉協議会編 1990
- 7 川瀬恵子：女子短期大学生の仲よし関係 日本心理学会第52会大会発表論文集 1988
- 8 田辺敦子：遊びと対人関係の発達 児童心理学 全国社会福祉協議会編 1991
- 9 神谷かつ江：いじめに関する一考察 東海女子短期大学紀要19 1993
- 10 神谷かつ江：自尊感情に及ばず被服に関する一考察 東海女子短期大学紀要18 1992
- 11 工藤力・西川正之 孤独感に関する研究 (1) 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討 実社会心理学研究22 1983
- 12 若林慎一郎：社会病理としての登校拒否 現代のエスプリ250学校にいけない子ども 至文堂 1988
- 13 山本和郎：大学コミュニティと学生相談 学生相談研究9 (1) 1987
- 14 斉藤勇：対人社会心理学重要研究集 対人魅力と対人欲求の心理 誠心書房 1987
- 15 小林良夫：女子学生の私語に関する人間関係論的一考察 東海女子短期大学紀要19 1993
- 16 永田法子：心理臨床大辞典 培風館 1995
- 17 成田善弘：対人恐怖症・最近の見解 現代精神医学体系 中山書店 1988
- 18 高橋徹：対人恐怖症 金原出版 1985
- 19 朝日新聞1992年2月17日朝刊
- 20 管佐和子：思春期女性の心理療法 創元社 1988
- 21 高木州一郎：青年期の摂食障害 臨床精神医学 19 (6) 1990
- 22 小林良夫・神谷かつ江：摂食障害学生に対する心理療法的アプローチ 東海女子短期大学紀要18 1992
- 23 春口徳男：役割交換書簡法 創元社 1989
- 24 福井安之：親との連携 現代のエスプリ296キャンパスでの心理臨床 至文堂 199225 精神医学辞典：弘文堂 1993
- 26 田畑治ら：いわゆる重篤といわれる学生の援助 現代のエスプリ296キャンパスでの心理臨床 至文堂1992
- 27 中井幹：教師の受容と共感 岐阜大学教育学部障害児教育実践センター年報1 1994
- 28 中西信夫ら：カウンセリングのすすめ方 有斐閣新書 1985
- 29 生田純子：思春期女子登校拒否の治療事例 東海女子大学研究紀要9 1989
- 30 遠藤辰男：アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版 1981

— 児童教育学科 初等教育 心理学 —

資料1

学生相談室利用状況

内 容 年 度		学	就	進	課	対	家	精 情	そ	計
		業	職	路	外 活 動	人 関 係	族 関 係	神 緒 障 障 害 害	の 他	
平成4年度	人 数	3	10	27	2	4	4	2	3	55
	延べ回数	3	15	44	2	17	13	5	5	104
	平均回数	1.0	1.5	1.6	1.0	4.2	3.2	2.5	1.6	1.8
平成5年度	人 数	7	6	26	2	6	2	4	3	56
	延べ回数	17	9	53	2	22	6	19	16	144
	平均回数	2.4	1.5	2.0	1.0	3.7	3.0	4.8	5.3	2.6
平成6年度	人 数	5	16	27	2	4	1	1	1	57
	延べ回数	12	24	45	2	24	6	2	2	117
	平均回数	2.4	1.5	1.7	1.0	6.0	6.0	2.0	2.0	2.1
平成7年度	人 数	1	9	17	1	3	2	10	2	45
	延べ回数	1	12	30	2	7	5	28	2	87
	平均回数	1.0	1.3	1.7	2.0	2.3	2.5	2.8	1.0	1.9
平成8年度	人 数	3	4	11	0	9	2	4	3	36
	延べ回数	5	6	13	0	42	6	43	5	120
	平均回数	1.6	1.5	1.1	0	4.6	3.0	10.7	1.6	3.3